

補習授業校と日本人学校との連携

前バンコク日本人学校 教諭

福井県福井市清水西小学校 教諭 石田 益之

キーワード：補習授業校，日本人学校との連携

1. はじめに

世界には日本人学校，補習授業校あわせて80以上の在外教育施設が設置されている。このうち補習校は，文部科学省から教員が派遣されている所と派遣されていない所に区分されている。

任国であるタイにも，補習授業校が2カ所（共に文部科学省派遣教員なし）設置されており，年度初めに文部科学省からの要請を受け，本校も数年前から継続的な支援を行っている。

そこで，補習授業校の現状と課題，そして本校との連携について報告する。

2. 補習授業校の概要と現状

補習授業校は，日本国籍を有する児童生徒を対象に，週末（土曜日または日曜日）に開講されている。通学する児童生徒は，月曜日から金曜日を現地校もしくはインターナショナル校で過ごしているため，補習授業校での学習内容は，特に日本語による算数・数学，国語の授業が中心で，子どもたちの日本語力の維持・向上を目指して行われている。

(1) 各補習授業校の概要

① A補習授業校

平成24年4月現在，小学部46名，中学部11名の計57名，A都市在留邦人子女全体の約20%弱が通学している。児童生徒については，日本語でのコミュニケーション力や，文章を読んだり，書いたりする力が十分に備わっている者も見られる。しかし，生活のほとんどを日本語以外の言語環境で送っているものもあり，その能力には大きな差が見られる。

② B補習授業校

平成24年4月現在，小学部20名，中学部2名の計22名，B都市在留邦人子女全体の約20%が通学している。ほとんどの児童生徒が二重国籍であり，日々の生活の中で日本語や日本文化に触れることが少ないため，友達同士のコミュニケーションは主に英語やタイ語といった日本語以外の言語である。

(2) 両補習授業校に共通する課題

① 基礎基本の定着

前述したように，児童生徒によって算数・数学，国語の学力には差が見られる。特に国語（日本語力）に関しては，普段，現地校やインターナショナル校に通い，ほとんど日本語に触れないケースもあるため，その差は大きなものである。いかにして全児童生徒に，基礎基本の確実な定着を図ることができるか。さらに，限られた数の講師のもと，どのように個々の能力に応じた指導を進めていくかということが課題である。

② 日本文化の理解

児童生徒の中には，日本での生活経験がゼロという者も少なくない。そのため，日本の四季や地理，歴史等に関する知識や理解が不十分である。しかし，日本国籍をもつ児童生徒においては，日本在住の児童生徒同様に日本文化や伝統を味わわせることも保護者の強い願いである。どのようにしてそれらを児童生徒に感じさせ，伝えていくかということが課題である。

③ 学習教材の不足

補習校のみならず、多くの在外教育施設においては、日本同様の教材の確保をすることは非常に難しい。また、資金面の問題もあり、日本から取り寄せることは容易ではない。できるだけ日本で用いられている教材や現有する限られたものを利用したいという思いはあるが、どのように準備し、活用しながら児童生徒の様々な力を育成していくかということが課題である。

3. 本校の支援の実際

上記したように、両補習授業校はいくつかの課題を抱えている。完全にサポートすることは難しいが、通学する子どもたちのために、本校は次のような支援を行った。

(1) 巡回指導（指導教員の派遣）

2002年8月より、文部科学省の依頼を受け、2、3日間の短期間ではあるが年に1回もしくは2回、両補習校の子どもたちに対し、授業を中心とした取り組みを行っている。毎年4月に本校で行われる補習授業校連絡協議会での要望事項や、メールでのやりとりを繰り返す中で明らかになる課題をふまえて、派遣教員や指導教科を決定していく。この巡回指導は、以下の3つのねらいのもと実施している。

① 基礎基本の定着

算数・数学、国語を中心に扱い、様々な日本語力や学力の児童生徒が基礎基本を身に付けていくことを目指す。日本語での指示が十分に理解できない児童生徒や日頃の学校生活の影響で疲れがたまっている児童生徒に対し、ゲーム的要素を取り入れたり、視覚教材を活用したりするなど、興味関心を高めながら取り組める学習を提供する。



自作カルタで遊ぶ子どもたち

② 豊かな学習経験

様々な教科学習に触れ、豊かな経験を積み、学ぶ楽しさや興味関心の幅を広げてほしいという願いから、普段の補習校の授業では扱っていない理科（実験）や図工・美術（ものづくり）、社会（日本の地理や歴史）、体育を実施する。具体例として、ペンハムのコマ、風で動くおもちゃ、アイスクリーム作り、エンカウンターなどを行った。

③ 講師や保護者との交流

講師に関しては、そのほとんどが教職未経験の保護者である。そのため、指導においては悩みも多い。プロ教師の立場から、興味関心の高め方や教材活用の仕方、学習規律の身に付け方など、即実践できる指導方法について助言する。また、保護者の悩みを共有し、本校での経験や日本の教育現状をふまえながら、対応策を共に考えたり、家庭学習や生活の仕方等について情報を提供したりする。

(2) 図書や副教材の寄贈

本校は児童生徒が2,700名を超えるマンモス校である。そのため、図書や副教材は他の在外教育施設と比べて充実している。現在約5万冊以上の図書があり、少しずつではあるが毎年入れ替えも行っている。そこで、廃棄図書の中でまだ使用できる物を寄贈し、両補習授業校では児童生徒の学習並びに余暇活動の一つとして利用されている。また、副教材についても、算数・数学、国語を中心に毎学期末毎、寄贈という形で、児童生徒に届けている。



本校からの寄贈図書と副教材

(3) 体験入学の実施

補習授業校の児童生徒にも集団生活や日本の文化に触れる機会の確保ということで、毎年10月に1週間の日程で体験入学の受入を行っている。通常の授業だけでなく、学校行事やクラブ活動など、多くの友達と触れる機会も準備しており、同学年の横のつながりだけでなく、異学年とのかかわりをもつこともある。普段通学している補習授業校とは規模が全く異なるため、児童生徒にとって得ることがたくさんあるようで、毎年継続して体験入学に参加している児童生徒も少なくない。補習授業校ならびに本校の子どもたちにとっては、年に1度の再会の場ということで楽しみにしており、交友関係を広げる機会にもなっている。

(4) メールでの相談対応

年に1, 2回の巡回指導時のみの相談会では、補習授業校における日々明らかになる課題の改善には対応することはできない。そこで、日々の授業における指導法やプリント、教材の提供など、タイムリーな事象に対して早急に応じるため、メールにてやりとりを行っている。

4. 近隣国における補習授業校の現状

両補習授業校に対する支援に関し、他国の補習授業校の取り組みから参考になることを探すため、そして日本人学校が設置されていない国における支援を今後、近隣日本人学校が役割を担う必要性が叫ばれていることから、隣国のC補習授業校へ視察に行く機会を得た。

(1) C補習授業校の概要

平成24年11月現在、幼稚部16名、小学部30名、中学部7名の計53名が通学している。約50%の児童生徒が二重国籍であり、全員がインターナショナル校に在籍している。学習の中心は算数・数学、国語であるが、進路のこともあり、6年生、中学部では理科や社会の授業も行われている。講師は約半数が教職経験者もしくは教員免許所有者である。また、講師登録者も10名以上おり、他の補習授業校で見られるような講師確保の問題は見られない。

(2) 他機関の支援

この国には日本人学校は設置されておらず、日本人学校はもとより、他機関による巡回指導等の支援も行われていない。それがゆえに、教職経験者が中心となって、研究授業を公開したり、授業記録を作成したり、保護者との連携を図るために学級通信を発行したり、限られた環境の中で子どもたちの学力アップにつながるための自助努力をしている。

(3) 補習授業校の課題

図書や副教材が不足していることである。この国では、タイと比べものにならないくらい、これらの物の入手は困難である。そのため、ノートやドリル等は、講師がオリジナルの物を作成、手前で製本し、児童生徒に配布している。また、図書に関してもかなり古い図書を大切に使用している現状である。

5. 今後の補習授業校との連携

このように、本校が行っている補習授業校に対する支援は多岐にわたっている。今後は、次に示すような点に注意して進めていけるのではないかと考えている。

まずは、これらの支援一つ一つの内容の質に目を向けることである。例えば、巡回指導に関しては、要望を受けた直後から準備を開始し、時間を費やししながら、より充実した授業内容を目指していく。また、メールを利用し、事前に児童生徒の実態把握をするためのワークシートや担当講師による児童生徒の学びの見取り内容を提供

してもらうことである。こうすることで、より児童生徒の実態に見合った授業展開に結びつけることができる。

次に目的意識の明確化である。現状を見ると、児童生徒の意識、保護者の願い、講師の目標など、それぞれの目的が異なっている。やはり目指すべきゴールは同じものでなければ、成果も半減してしまう。そのゴールを設定するための情報の一つとして、日本の教育、ならびに卒業後の進路の選択肢など、可能な範囲で提供していくことも可能である。

6. おわりに

今回の研究を通して、補習授業校が抱える課題が明らかになった。だが、これはほんの一部にすぎない。運営面や金銭面など、我々派遣教員ではどうすることもできないものもあるが、日本人学校として、教師として可能な支援はもちろんある。週末、しかも休日に日本語力アップのために補習授業校へ通う児童生徒、日本人学校に通う児童生徒、区分することなく、同じ「海外で生活する子どもたち」に対し、「子どもたちのために何ができるか」と考え、教育のプロとして、今後も児童生徒の学びのサポートを継続してもらいたい。